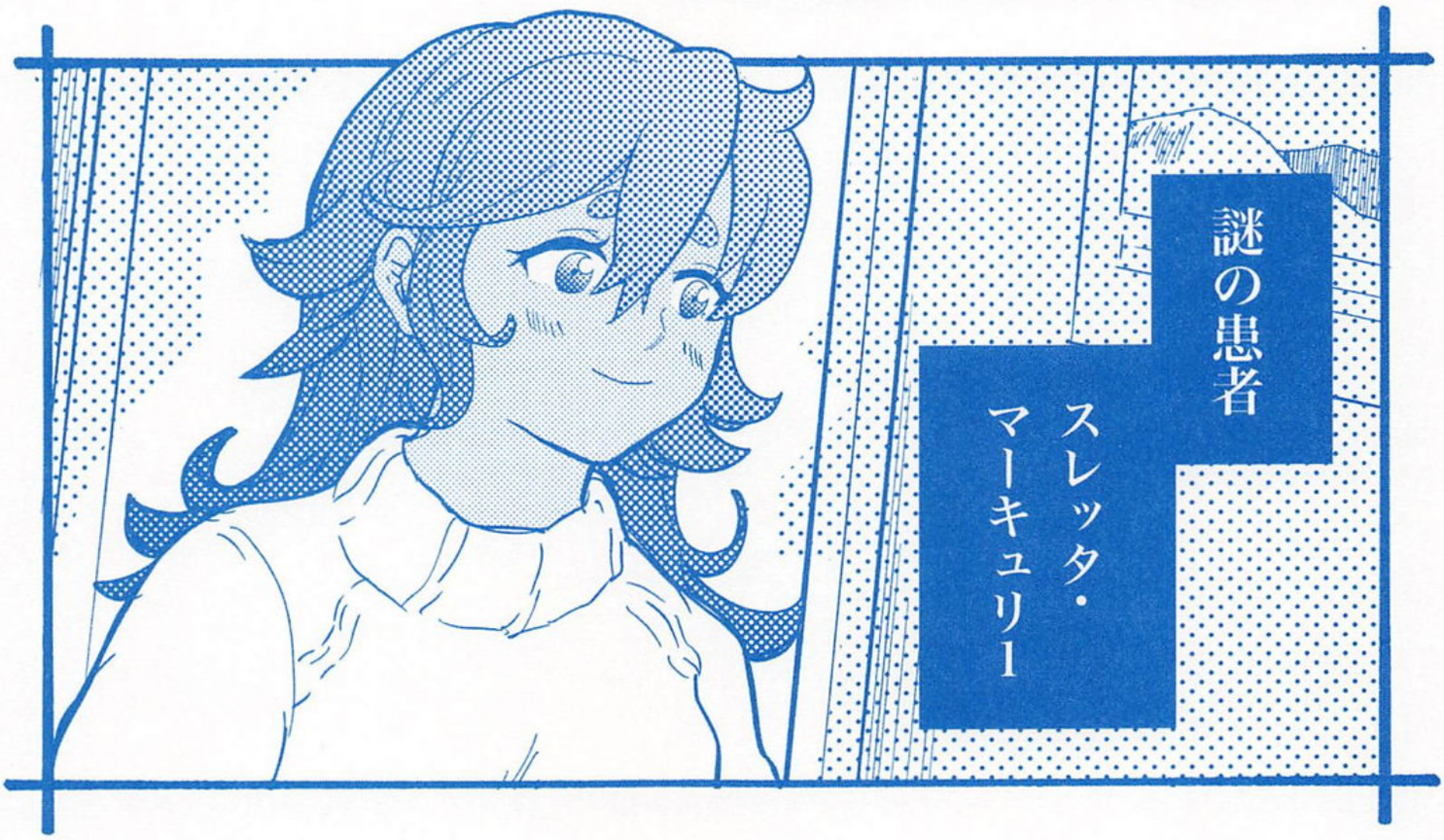
医者と患者の不適切な関係

Miorine × Suletta

R-18 Adult Only



注意！なんかAVみたいだよ！

トンチキどすけべお医者さんパロディです！
ミオリネさんが童貞みたいな女医で、スレッタちゃんがどすけべな患者です。
割と何でも許せます！という方向けです！

Contents

3p - 医者と患者の不適切な関係

Guest

17p - 仏頂面先生と魅惑の赤毛の娘

25p - 振り返れば奴がいる

30p - 爆竹

32p - ドスケベ漫画

ミオリネ・レンブラン
女医

○○さんのカルテある？

はい

親からひきついだ田舎の診療所に勤務している

若い人は少なくおじいちゃんおばあちゃんが多い

お酒ひかえてください

え～？

田舎はのどかで趣味の園芸には最適だ

特にも不満はないが唯一の問題は出会いが少ないこと

ま～別にいいんだけど

ケホッ

最後の方どうぞ

ゴホッゲホッ

コホン

こんにちは

こんな若い人この町にいたっけ？

どうされましたか？

咳が止まらず体が熱っぽい…

風邪の症状ですね…喉を見てみましょうか

…

カチ

口を大きく開けてください

あー

ハァー…

ハァー…

喉に炎症がありますね…

めちゃくちゃエロいな

どうかしました？

いや何でも！聴診するので胸元開けてください

ごそ…
プチ
プチ
パサ…
?
!!
バァーン!!
たゆん
あ、あの
ぜ、ぜ…
アセ
アセ
全部
開けなくても
良いん
ですよ!?
風邪ひくぞ!
でもこの方が
診察しやすい
ですよ?
じ…
ゴク
たゆん
そ、
そうです
けど…
ドキ
ドキ
ドキ

ぴと
あっ
?
んっ…
ぴと
んぁ…
ぎゅっ
ぴと
ふ…
んんっ
あっ
ふ…
か、感じてる?
先生
ぐーいっ
むにっ
私の身体
キャー
もっと触って見てください
なっ

やっ
やめ…
ぐぐぐ…
んっ
ふ
んっ
さわっ
すり…
先生
ここ…
!!
濡れています
ドキ
ドキ
あ
ここも先生に
診てほしいです…
ズ
チッ
ドキ
ドキ
イガイガッ
がばっ

や…
あっ
はぁ
はぁ
ちゅっ
ちゅ
っ…
かわいい
ちゅう
ちゅ〜
あ…
やっ
んっ
くに
くに
ちゅっ
ん…ちゅ
ぎゅ
ん…
ぬる
ちゅっ
ちゅ
んんっ
ふっ…
先生…
下も触って
ください

あっ
ん
くちゃ
くちゃ
くちゃ
すごい濡れて来てるわね…
中をよく見ないと…
〜〜〜〜!!
ビクッ
ああああっ
ぢゃっ
ぢゃっ
ぢゃぢ
ぢゃるるる
んんんっ
ぢゃっ
ぢゃっ
ぬと…
ハァハァ…
足開ける？
ふえ？
中の方を触診してみるから…
ぬる
ぬる
ビクッ

足もっと開いて…
はい…
は…
ビク
ビク
あっあっ
あっ 気持ちいい…
ぐちゃ
ぐちゃ
ぐちゃ
くちゃ
ちゃぷ
じゃぶ
あっ…あ…んっ
じゃぶ
ぷ
あっ
ビクッ
ぐリ
ぐリ
そこ
ナカ…熱いですね…
ぐこっ
ぐこっ
熱を発散しないと…
あ
ダメ
イっちゃ

んっ

ビクッ

ん〜〜♥

ビクッ

ビクッ

ハァ…

ハァ…

ハァ…

…お薬出しますから
また来てください…

…はい

次の日

づぃ〜〜〜

風邪を引いた

ハァ

やっちゃった

ハァ…

ハァ…

しかしあの女の人…一体誰だったのかしら…

ぜぇー ぜぇー

先生〜お見舞いの方が来てます

…お見舞い？

じゃーんっ

こんにちは

ひらひら

がばっ

ぇっ！

ちょっ

ヒエエエエ

なっ

ごめんなさい…

やっぱり風邪うつしてしまいましたね

な、なんでここに

また来てくださいって言ったので

きょ、今日はお休み…

やっ

フフフ…

また私に
うつしたら
治りますよね？

ね…先生

わ〜ぁ…

ギシッ

ギシッ

医者と患者の不適切な関係は
続くのであった…

おわり

あとがき

はい、AV漫画でした。スレッタ攻めのミオスレ描きたいなと思ってたらどんどんイメージプレイみたいになってしまいました。大丈夫だったでしょうか。。ただ私はスレッタのおっぱいを真面目に聴診するミオリネさんが描きたかっただけなのに…。終わりのあと二人はどうなったのでしょうか…ミオリネさんの運命はいかに。

一応スレッタが何者なのかという設定もあるんですが盛り込めなかったのでまたどこかで描けたらいいな。

ゲストのタケマルさん、かわはぎさん、なべさん、まこの助さんありがとうございました。皆さんエロへの情熱が深くて素敵です。

よければマシュマロにて
ご感想をお寄せください

奥付

タイトル：医者と患者の不適切な関係

発行日：2024/10/27 COMIC CITY SPARK 19
スレミオプチオンリー「いつか黄金の穂の中で」
著者：ＦヲＦヲ
サークル：ＦヲＦヲのToMaTo
X:@eFuWo
印刷所：くりえい社

※この本は、ファンが個人的に制作した非公式のファンブックです。
※この本は成人向け（R18）作品です。
18歳未満の方の閲覧は固くお断りいたします。
※無断転載、複写、複製、配布などの行為を固く禁じます。
※インターネット上にアップロードはする行為は犯罪です。

仏頂面先生と魅惑の赤毛の娘

まこの助

ここは町外れの小さな小さなクリニック。そこの女医、ミオリネ・レンブランは仏頂面で、患者を診るよりトマトを育てることに精を出す変り者だと有名で、患者はほとんどいなかった。

「あの……。今、診察時間……ですか？」

その寂れたクリニックを訪れたのは、癖のある赤毛が愛らしいスレッタ・マーキュリー。人に言えない悩みを抱えて、寂れたクリニックであれば目立たずに相談できると思い、訪れたのだった。

「あぁ、一応そうだけど、ちょっと待っててもらえる？　摘果しないといけないから」

患者がほとんど来ないせいか、受付にも人はおらず、医師一人しかいないクリニックのようだ。裏庭から顔を出したミオリネ・レンブラン医師は白衣など着ておらず、長靴と麦わら帽子、首にタオルという出で立ちで、軍手をした手にはハサミとまだ青い小ぶりなトマトが乗っていた。スレッタは、誰もいない待合室に座り「噂は本当だったんだ」と妙に感心していた。

十五分ほど経った頃、やっとミオリネ医師が戻ってきて診察室へスレッタを招き入れた。

「それで？　今日はどうされましたか」

わざわざこんな辺鄙なクリニックに来るなんて――なんて自虐的な言葉は飲み込んで、白衣を羽織りながらスレッタに声をかける。

「あの……。は、恥ずかしいんですけど……」

スレッタは大きく豊かな胸の前で手を合わせてもじもじとしていた。

よく見れば、スレッタは女性にしては背丈が高く、その上胸もお尻も豊かで、恵まれた身体つきだ。それなのに自信がなさそうに猫背になりながら俯き気味に座っている。

「私は医者よ。遠慮せず話して」

「は、はい。実は……」

恥ずかしそうに頬を染めるスレッタを見て、むずむずと良からぬ気持ちが高まってくる事を自覚した。その身体つき、抜群のスタイルの良さ、その上あどけなさを残したかわいらしい顔立ち。その魅惑のギャップは、これまで何人をそういう気分にさせてきたのだろう。

正直ミオリネにとって、スレッタはかなり、いや、ど真ん中でタイプだった。

「む、胸……ち、乳首が……出てなくて……。何か、よくないのかもって……心配で」

「見せて!!」

ミオリネの口から即座に上擦った大きな声が出る。
「ひゃ、ひゃい……！」
スレッタはミオリネの鬼気迫る雰囲気に、自分の症状は良くないのかも、と慌てて上着を脱いだ。
たゆん、という音が聞こえそうなほど豊かなスレッタの胸が、下着からまろび出る。ミオリネの喉がごくりと鳴った。
たしかにスレッタの乳首はいわゆる陥没乳首であった。褐色の健康的でつややかな肌に、少し赤みが指したそこはふっくらとして、今のスレッタと同じように恥ずかしそうにその姿を隠していた。
――なん……て、いやらしい……。
ミオリネの目は、そこに釘付けになった。
「せ、先生。どう、ですか……？」
涙目のスレッタが胸を晒して、上目遣いでミオリネを見つめた。
「これは……良くないわね。触診します」
「は、はい……」
誘惑に負けたミオリネの詭弁をスレッタは素直に受け入れた。
スレッタは、少しだけ身を強張らせてミオリネの手の行先を見つめた。その白く繊細な指が自分の胸の先へ触れようとする事に、ドキドキと胸が高鳴る。
ふに、とミオリネの指が乳輪に触れた。
ぴくりと反応してしまい、スレッタは恥ずかしくなる。
ミオリネの指は中央の窪んだ部分には触れずに、ふにふにと乳輪を押したり、胸と乳輪の境目を行ったり来たりしてその感触を確かめているようだ。
「ふっ……、ふぅ……」
なんだかえっちな触り方に感じてしまって、ミオリネの指が動くたびにぴくりと身体が反応してしまう。スレッタは恥ずかしさでどうにかなってしまいそうだ。せめて息が弾んでしまうのをなんとかしたい。
「んん……。これは……ふむ」
けれどミオリネの目はじっとスレッタの乳輪を見つめ、真剣そのものに見えた。
――真面目に診てくれてるのに、こんな気分になっちゃうなんて……、恥ずかしい。
変り者だと聞いてはいたけれど、こんなに美しい人だったなんて。その美しい人がこんなに真剣に自分の胸を触っているなんて。
その事実がスレッタを昂らせてしまう。
ミオリネの指が触れる所が徐々に熱くなっていく。中に隠れている胸の先端がじんじんとしてきて、その白く美しい指に早く触れてほしいと、その美しいグレーの瞳の前に早く暴かれてほしいと、期待してしまっている。

――どうしよう、こんなつもりじゃなかったのに。先生に触ってもらったら……ドキドキしてきちゃった……。

「ふぅ……、ふぅ」

ミオリネの指が、ついに中央の窪みに触れそうになった時、期待で下腹部がきゅんと疼く。しかし、その手は無情にも離れていってしまった。

「あっ……？」

思わず漏れてしまった声に、ミオリネは目を細めた。

「ええと、スレッタ・マーキュリーさん」

問診票を見ながら、見た目も声もスタイルも、陥没乳首である事も、全てが好みのタイプである人の名前を確認する。

「は、はい……」

「もう少し詳しく調べないといけないわ。こちらのベッドに横になって」

「あ、あ……。はい」

スレッタを診察室に置いてある簡易的なベッドに横たわるよう促す。スレッタは豊かな胸を両手で下から持ち上げるように隠してベッドに移動した。

――なんて、えっちなの……。

あまりにも魅力的な胸に目が釘付けになってしまう。

素直に横になったスレッタは緊張した面持ちでミオリネを見上げる。気のせいか両脚をもじもじとすり合わせているようにも見えた。

「深呼吸して」

スレッタの緊張を解くように言ってはいるが、自らの興奮を鎮めるため、自分への言葉でもある。

「は、はい……」

スレッタがふー、と大きく息を吐いたのを見て、ミオリネはスレッタの両方の胸全体を両手で下から持ち上げるように揉み上げた。想像通り柔らかく、温かな乳房にミオリネの指がむにゅう、と沈み込む。

「あっ、先生……?!」

「リラックス」

これも自分への言葉。医者のくせに興奮しすぎて鼻血が出そう。

「あ、は……、はい」

恥ずかしそうに頬を染めながら、それでもミオリネの言葉に素直に従うスレッタがかわいい。

ミオリネはかわいいスレッタの柔らかい胸を、ゆっくりゆっくり揉みしだいた。

「はっ……、はぁ、ふぅ……」

スレッタの息遣いが荒くなってくる。ミオリネはそこで初めて乳首自体に刺激を与えることにした。

揉み上げるついでに、二本の指で乳輪の外側から中に隠れている乳首を挟んでみる。確かに中に、少しずつ固くなり始め

た乳首の存在を指に感じた。
「あっ……！」
小さな悲鳴とともに、びくんっとスレッタの腰が跳ねる。その直後かぁぁっっ耳まで紅潮させて、スレッタは恥ずかしそうに顔を逸らせた。
かわいい。
ミオリネは止められなくなった興奮で、ふーーっと鼻から息を吐いた。
「うん、いいわ。こうすれば、乳首、出てくる」
到底医者らしくない、頭の悪い言葉しか出てこなくなってくる。
「ほ、本当ですか？」
けれど、スレッタは潤んだ瞳で懇願するようにミオリネを見上げた。
そんな目で見られたら止まらなくなる――。
「乳首、出したい？」
ただのセクハラ発言になってしまったが、もう無理だ。既にミオリネも、はぁはぁと弾む息を抑えることができなくなりつつある。
「は、はい……、出して、下さい」
医者からのセクハラ発言を受けて、むしろ嬉しそうに、とろんと蕩けた目でミオリネにおねだりをするように、スレッタはそう言った。
――いやらしすぎる!!
ミオリネは、口を開けば卑猥な言葉しか出てこなくなりそうだったので、これ以上失態を犯さないために、一つ頷くだけで胸への触診を再開した。
ミオリネの指はもはや躊躇もなく埋もれた乳首を摘むように乳輪を二本の指で挟み、時折胸全体を下からぎゅうっと鷲掴みにしたりして刺激し続けた。
美しい顔を紅潮させて息を弾ませるようにしながら自分の胸を揉みしだいているミオリネを見て、スレッタの胸の奥が、下半身が切なくきゅんきゅんと疼き出す。
乳首、出てほしい。この先生に、見てほしい。
そんな恥ずかしい事を考えるほどには、スレッタの頭の中は蕩けてしまっていた。
突然、びりっと胸の先端から刺激が走った。
「あっ、ん！」
「は……はぁ……。少し、見えた」
少しだけ頭を出した乳首を、指でコリコリと刺激され、スレッタは思わず腰をうねらせてしまう。
「や、あ……っ、んっ！」
ビリビリとした刺激が下腹部へ伝わり、もじもじとすり合わせた脚の間は、ぬるりとした感触があった。
「ふーっ、ふーっ、す、スレッタ……さん」

「はい、はぁ……っ、はぁ、せんせ……」
「もう、少し」
「あ、ありがとう、ございます……」
ミオリネの瞳は最初見た時とはうって変わって熱を帯び、視線自体が熱いくらいだった。
「でも、なかなか頑固ね。ふーっ……、少し吸い出して、みましょう」
そう言ったミオリネの唇が、妙に艶やかに見えた。
「す、吸い……？」
「嫌だったら、やめますが」
「い、いえっ！　あの、えと……す、吸い出して、下さい……！」
「やってみましょう」
ミオリネの目が細められ、舌が一瞬チラリと見えた気がして、スレッタはその美しい唇が胸に近づくのを期待と不安で待った。しかしミオリネはデスクの引き出しをあさりだし、ガサゴソと何か探しているようだ。
それを見たスレッタは自分があからさまに落胆した事に気がついた。
「あの……先生？」
「吸引器、つかいましょう」
嫌だ――。
スレッタは即座にそう感じた。
「あ、あの、先生。吸引器は……ちょっと、怖い、です」
ミオリネの動きが止まった。
ギギギと音がしそうな動きでこちらを振り返る。手には吸引器を持ったまま、もはや血走っていると言ってもいいような目でスレッタを、スレッタの少し見えてきた乳首を、見た。そして喉がごくりと動くのをスレッタは見逃さなかった。
「せ、先生が……。あの……、吸い出して、下さい」
「えっ……っ!!」
ミオリネは何か言いかけて飲み込んだ。

えっろ!!!!!
危なく口をついて出るところだった。
誘うような事を言っておきながら、顔を真っ赤に染めて恥じらうように顔を背けるスレッタへの欲情はもう止められそうにない。
両腕を組むようにして下から胸を支え、ミオリネに差し出すようにしながらもふるふると震え、与えられる刺激を待つスレッタを上から見下ろし、生唾を飲み込む。
ふーっ、ふーっと荒い息を漏らし、手に持っていた吸引器はぽいっと放り出して白衣の裾をぎゅうと握り、今すぐにでも溢れ出そうな欲情をなんとか抑え込んだ。
「い……、いいの？」
震える指で自らの口を指さして、一応確認する。
「はい。お、お願い、します」

スレッタはとろんと潤んだ瞳でミオリネの唇を見ながら、熱に浮かされるようにそう言った。それを聞いた途端、ミオリネの鼻から興奮の高まりがむふーーーっという音を立てて出ていった。

「じゃあっ……、い、いくわよ」

「は、はい……」

ミオリネは手を乳輪に添えて二本の指で挟み、押し出すように少し力を込めた。

「んっ……！」

スレッタはそれだけでもビクッと身体を震わせた。

かわいい。

身体を屈めてスレッタの胸へ顔を近づける。口を開くと、はー、はーっと自分の興奮した吐息が、スレッタの可愛らしく、ちょこんと頭を出した乳首に当たって跳ね返ってきた。

はっ、はっと弾むスレッタの息遣いを額に感じ、期待しているのが伝わってくる。かわいい。

舌先で、ちょんと乳首の頭を突いた。

「んんっ……！」

再びビクッとスレッタの腰が跳ねる。

続いて、れろ、と舐め上げてみた。

「ふぁっ……、んぅ」

スレッタの鼻にかかった甘い声がミオリネの気を大きくした。一気にがぽっとかぶり付き、じゅっと音がするほどに強く吸い上げる。

「きゃんっ！」

するとスレッタの悲鳴と共に、隠れていた乳首がミオリネの口の中でついに全貌を現す。念の為、乳首全体を舌で丁寧に舐めて転がし、更にもう一度じゅるっという音を出して吸い上げた。

強く吸い上げたスレッタの乳首を一気に解放する。ミオリネの口に引っ張られ、円錐型に持ち上げられていた乳房がぶるんっという音をたてて元の位置に戻った。乳房の先端には、未だに隠れたもう片方の乳首と違い、どこか誇らしげに大きく勃ち上がった乳首があった。

「ほら、ふーっ……。キレイな乳首」

満足感に大きくため息が漏れる。

「あ、あぁっ……、先生。ありがとう、ございます……！」

ぷりっときれいに頭を出した自分の胸の先端を見て、スレッタの瞳がキラキラと輝いた。

でも——。

「まだよ、両方出さなくちゃ」

遠慮なくもう片方の乳首に、はむっとむしゃぶりつく。

「あんっ」

かわいらしいスレッタの声に、ミオリネの中でどんどん欲望が高まっていく。

もっと声を聞きたい。もっとこの子を知りたい。もっとスレ

ッタが欲しい。
「あっ、あっ……先生っ」
スレッタも、もはや医療行為を通り越してミオリネ自身を感じ始めているようだ。
ならば、と今度は少しじっくりと時間をかけて刺激を与えることにした。
さっき指で胸と乳輪の感触の違いを味わったので、今度は舌で確かめる。胸は張りがあって弾力があるのに対して、舌を乳輪へ移動させると皮膚の薄さとつるっとした舌触りが心地良い。
その間もスレッタは鼻にかかった切なげな声を漏らして刺激に耐えている。そのうちスレッタの手がミオリネの肩に遠慮がちに置かれて、ミオリネはたったそれだけの事で胸が熱くなった。
乳輪の真ん中で遠慮がちに頭を覗かせている乳首を舌でなぞる。ビクッとスレッタの身体が震えた。ミオリネは窪んだ乳輪と乳首の間に舌を挿し入れ、窪み全体を舌で味わう。
「ひ……んっ」
つぽつぽと窪みに舌を出し挿れする。スレッタの腰が揺れた。
ミオリネからの刺激で乳首に血流が集まってきたのか、どんどん固く大きくなってきた。そろそろ吸い出さなくても自分の力で勃ち上がりそうだ。でも、それではつまらない。
ミオリネはもう一度窪みに舌を挿し入れて乳首をくるっと舐めた後、名残惜しさを振り切って、思いきり力を込めてじゅうっと吸い上げた。
「あぅっん……!!」
スレッタの腰が一際大きく跳ねた。
なんてかわいいんだろう。
べっとりと濡れた唾液を吸い取るように、今度はゆっくり優しく、大きく勃ち上がった乳首に沿って吸い上げて、最後にちゅぽっと音をたてて解放した。
完全に蕩けてしまった目でミオリネを見つめ、ふーっ、ふーっと荒い息を漏らすスレッタは、これまで見たこともないくらい、だれよりも魅力的だった。
「ほら、こっちもちゃんと出た」
ミオリネは一つ大きな仕事をやり遂げた達成感でふーーっと大きく息を吐いた。
「はっ、はいっ……。あり、ありがとう、ございます」
「少しも変じゃない。とても素敵なおっぱい」
いつの間にか額に汗が浮いていたので袖で軽く拭う。ミオリネ自身、ここまでの達成感は初めてかもしれない。スレッタの誇らしげな胸の先端を見つめ、ミオリネも誇らしい気分で胸を張った。
スレッタは自分の胸を見つめ、嬉しそうに瞳を輝かせる。
「すごい……。こんなの、はじめて、です。……あぁ、嬉しい」

豊かで柔らかで艶やかな胸を自ら持ち上げてうっとりと見下ろすスレッタの表情は神々しいほどに美しく、ミオリネの中に生まれた特別な感情を決定付けるには十分だった。

「……しばらくすると元に戻ってしまうと思うけど、放っておくと乳腺炎になったりするから……」

「あのっ……、通います」

またすぐにでもこの子に会うための口実を考えていたのに、スレッタに先回りされてしまった。

「ん。……ん？」

「あの……。明日も、来て、いいですか？」

「明日……？」

「だめ、ですか？　また……、吸い出して、下さい。先生に……お願いしたいんです」

ぴんっと誇らしげな胸の先端を見せつけるようにしながら、耳まで真っ赤な顔のスレッタは上目遣いでそう言った。

――えっっっちすぎる!!!!

ミオリネの心の中にある何かのボルテージが一気にぎゅいんっと上がる音がした。

「いいわ。私が毎日じっくり吸い出してあげる。明日も、明後日も……、ずっと、毎日来なさい！」

「――っ！　はい、ありがとう、ございます！」

スレッタはミオリネの手をとって、飛び上がって喜んだ。揺れる魅惑の胸と飛び抜けて可愛らしいその笑顔に、ミオリネの心はすっかり奪われてしまったのだった。

◇◇◇

ここは町外れの小さな小さなクリニック。そこの女医、ミオリネ・レンブランは仏頂面で、患者を診るよりトマトを育てることに精を出す変り者だと有名で、患者はほとんどいなかった。

医者一人しかいないと噂だったその寂れたクリニックには、いつしか愛らしい笑顔の赤髪の娘が住むようになり、二人で仲良くトマトの世話をする姿が見られるようになっていた。

ミオリネ・レンブランの仏頂面はいつの頃からか柔らかくなり、そのおかげか少ないながらも患者は増えてきていた。

ミオリネと赤毛の娘――スレッタ・マーキュリーは互いの手を取り合い、小さな小さなクリニックで、いつまでも仲睦まじく暮らしていったとさ。

めでたし、めでたし。

ちょっとそこの！
スポーツ万能難関オペを軽々こなす、
エリート外科医スレッタマーキュリーってあんた？

は、はい！
わたしです…！
あ…
なに？人の顔じろじろ見て
す、すみませんっ
…わたしの患者を
と思ったけど、
もういいわ

えっと、

ほら
次は口説いて
くるし、だから

遠くから見かけて
いたんですけどっ

レンブランさん
ですよね？

中庭のとこ
花壇！

お世話して
ましたよね

お花、綺麗です！

休憩の時
よく行くん
ですよー

へへっ

…。
あんた仕事は出来るの？
はい？
手術!!
失敗しない!?
って聞いてんの、
そりゃはい!!

わたし
失敗しませんので！

…ついてきて

はい！
レンブランさん

ミオリネ
レンブランよ

…ミオリネ
さん！

今日はどうされました？
ち
も
お
あのぉ…
ムラムラするというかしたというかされたい気持ちなんですが
すぐに手術が必要ですね
わぁ♡
くるっ

女医リネというか
お医者さんごっこでしたね。
浣腸プレイじゃないですよ。

こっちも必要かもって。

では、おじゃましました！ ながねこ@ね

Fヲさん女医リネスケベブック発行おめでとうございます!!! タケマル

医者と患者の不適切な関係

The Witch From Mercury
Miorine × Suletta Fan Book
@COMIC CITY SPARK 19 10/27 sun

プチオンリー　いつか黄金の穂の中で